

The Influence of Saigoku Risshihen on the Concept of Japanese 'Shousetsu' (Ⅱ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/25331

『西國立志編』と明治初期の「小説」観（II）

社会環境科学研究科 国際社会環境学専攻

三川 智央

The Influence of *Saigoku Risshihen* on the Concept of Japanese 'Shousetsu' (II)

MIKAWA Tomohisa

要旨

『セルフ・ヘルプ』はサミュエル・スマイルズによって書かれ、1859年にイギリスで刊行された。刊行後、この著はさまざまな言語に翻訳されたが、日本では中村正直が『西國立志編』の題名で邦訳し、明治3(1870)年から明治4(1871)年にかけて刊行した。この『セルフ・ヘルプ』の邦訳版は、「小説」の概念を含め、明治初期の日本人に大きな影響を与えた。しかし、『西國立志編』が当時の社会に与えた影響は、現在では、そのほとんどが忘れ去られ、正しく評価されていない。本稿では、『西國立志編』が提示する「小説」の概念を考察し、『西國立志編』が明治初年代の日本の「小説」の状況に、どのような影響を及ぼしたのかを明らかにしたい。

Abstract

Self-Help was written by Samuel Smiles and published in the U.K. in 1859. After its publication, the book was translated into various languages. It was translated into Japanese by Nakamura Masanao, and was published under the title of *Saigoku Risshihen* from 1870 to 1871. This Japanese version of *Self-Help* had a great deal of influence on the minds of the Japanese people of the early period of the Meiji era, including their concept of 'shousetsu', the Japanese version of the novel. However, not all the roles that *Saigoku Risshihen* played in this era are remembered and appreciated today. In this study, I will analyze the concept of 'shousetsu' presented in *Saigoku Risshihen* and clarify the nature of the influence that the concept of 'shousetsu' had on the minds of the Japanese people in that era.

Key Words

Meiji, novel, Saigoku Risshihen, Self-Help

7

ここまでに見てきたように、〈事実とはかけ離れた虚構を、卑俗な面白さばかりを強調して描き、人の心を惑わせる、無用かつ有害な文芸〉という『西國立志編』によって提示された「小説」の概念は、原著 *Self-Help* 中の novel に対する概念と、

大筋では共通していると言ってよいだろう。しかし、*Self-Help* が novel の文芸としての価値を全面的には否定しておらず、程度をわきまえた上での娯楽としての読書を容認していたのに対し、『西國立志編』では、そのようなニュアンスが翻訳の過程で消し去られ、専ら「小説」の害のみが強調された形となっている。『西國立志編』は

「小説」に関して言えば、自助の精神を伝えると言うよりも、「小説」排除の思想を強制するものとなってしまっているのである。

では、『西國立志編』がこのような形で提示した「小説」概念は、明治初年代の日本の社会にどのような影響を与えたのか。本稿の後半では、この点を明らかにしていきたいと思うが、そのためには、まず、近世の日本において「小説」がどのようなものとして人々に認識されていたのかを、確認しておく必要があるだろう。

そもそも、「小説」は、「とるに足らないちっぽけな言説」といった意味の中国語を語源とする。やがてそれが、中国において、「稗官によって収集された民間の風俗や噂話といったものの記録」、つまり「稗史」を指すようにもなり、さらに、宋・明といった時代になると、その時代に新たに発生した白話(口語)による文芸を「白話小説」と呼ぶようにもなる。当然のことながら、そこには、社会的価値を有する「正史」に対して、「小説」をとるに足らないものとする社会意識が反映されていたと考えられる。それを政治的に禁圧するかどうかは別として、中国の社会においては、「小説」は常に価値のないものとして扱われ、正統的な文学からは疎外し続けられた存在であったと言える¹⁾。

一方、近世の日本において、「小説」という語が用いられるようになったのは、江戸中期の唐話(中国語)の流行をきっかけとし、白話小説が多く中国から輸入され、知識人の間に広がったからだと考えられる。中村幸彦『近世比較文学攷』には、この点に関して次のような記述がある²⁾。

何時の程にか、唐話学習のために白話の小説の読習を指導する人々を「小説家」、或いは稗官などと称することになった。世に、冠山、白駒、松峽、玖珂、南濤を稗官の五大家などと呼ぶのも、この意味である。かくて唐話の流行につれて、白話文学、特に白話小説を講義し解説する人が増加すると共に、唐話を習わずして、この白話文学のみを読誦する読書

家も出現する。

明治の初めに至るまで、「小説」がしばしば「稗官」という語を伴って「稗官小説」と呼ばれたのも、こうした経緯を踏まえると納得がいく。近世の日本において、「小説」は、まず、中国舶来の白話小説を指すものとして知識人の間に定着したのである。そして、ここで重要なのは、中国においては禁圧の対象となっていたこれらの小説が、日本においては、「通俗の書」であり「専ら詐偽機謀を説く」ものであるとの認識を持たれながらも、実際には、舶来の文化を伝えるものとしての学問的な重要性が優先され、幕府の取り締まりを受けることもなく公然と流通していたという事実である。中村幸彦の前掲書には、『水滸伝』についての次のような記述もある³⁾。

いずれにせよ、寛永十六年、正保三年の間に、御文庫に『水滸』が入ったことに間違いはない。(中略)熊本細川家の藩校の『時習館蔵書目』に「水滸伝 二帙十二本」「同 二帙二十四本」。松平定信の『浴恩園文庫書籍目録』に「忠義水滸伝 廿冊」。渡辺崋山の『渡辺登蔵書目録』に「水滸伝 廿三冊」など、公でも私でも、大名から陪臣まで、種々の目録に、この書の名を発見する。

中国では明末から清にかけて禁書とされた『水滸伝』が、近世の日本においては、「御文庫」と呼ばれる幕府の文庫を始めとし、藩校や大名、陪臣などによっても所蔵されていたことがわかる。中国文化の中では疎外し続けられる運命にあった白話小説が、日本においては、中国文化であるが故に貴ばれたというのはおかしな話だが、事実としてこのような現象が生じていたのである。

そしてその後、「小説」は日本の戯作を指す言葉としてもしばしば用いられるようになった。江戸後期の戯作者・曲亭馬琴は、読本『椿説弓張月』「拾遺」の「序」で、「今弓張月一書、雖云小説、然引用故實、悉遵正史」(今弓張月の一書、小説

と云ふと雖も、然るに故實を引用し、悉く正史に遵ふと記し⁴⁾、同じく式亭三馬は、滑稽本『浮世風呂』二編の「自序」で「このをんなが這女湯せうせつの小説ハ、素より漫戯まんげの書しよといへども、心こころを用ゐて讀よむ則ときは水飴みづあめの味あじはひ易やすく。善ぜん悪あく邪じや正せうの行状ぎやうじやうハおのづからに曉得さとすべし」と記している⁵⁾。これも元来は、中国の白話小説に対する「国字による小説」という意味合いで使われたものが、戯作全般に広がったものと思われる⁶⁾が、ここではその経緯に深入りはせず、とにかく取りあげた用例を見てみることにしよう。いずれも自らの戯作を「小説」と呼んでいる例だが、自著を「小説」と表現した戯作者たちの心情は、どのようなものであったのか。二つの例文ともに、表面的には自作を「とるに足らないもの」として卑下しているようでありながら、後に続く言葉を見ると、実はその裏に、したたかな自信が隠されているのが伝わってくる。「小説」という言葉は、その背景に舶来の中国文化を感じさせる独特な雰囲気を持った漢語として、その原義が自らを卑下するものであったにも関わらず、戯作に関わる日本人の間では、むしろ誇らしげなニュアンスを内に含んで用いられたと考えるのが、妥当なのではないだろうか。

ただし、彼らがそのような意味合いを込めて「小説」と呼んだ近世の戯作も、中国の白話小説などに縁遠い市井の読者の意識の中では、「読本」であり「草双紙」でしかなかった。しかも、近世文化の中での戯作の扱いは、あくまで「俗文芸」であり、「婦女幼童」の「翫び物」でしかなく、時に幕府の出版統制の対象ともされた。しかし、これもまた、中国社会において白話小説が公に禁圧され続けたのとは異なり、日本の戯作は、巧みな自主規制によって時代や社会に適応しつつ、実質的には近世文化の一翼を担う存在となっていたと言える。文化四(一八〇七)年、幕府が検閲強化のために四名の絵入読本改掛煎肝名主を任命した際、山東京伝と曲亭馬琴が連名で名主の一人に提出した口上書⁷⁾には、彼らの創作に対する意識が如実に表れている。その一部を引用する。

草紙讀本類之義ニ付先年町御觸有之候後堅相守猶又其時々之流行風聞等之儀ハ決而書著し不申第一ニ勸善ノ懲悪を正敷仕善人孝子忠臣之傳をおもに綴り成丈童蒙婦女子之心得ニも可相成儀を作り設可申旨心掛罷在候。

「草紙や読本などについては、お触れを堅く守り、その時々々の流行風聞は決して書かず、第一に勸善懲悪を正しく、善人・孝子・忠臣の伝を主に綴り、なるべく童蒙や婦女子の心得にもなるようなことを作ろうと心掛けています」といった内容である。つまり、近世日本の戯作(=一部の知識人の間では「小説」という認識もあった)は、〈勸善懲悪〉という道徳を自らの身に纏い、正統な学問には縁のない人々にも教訓となるような内容を描くということを名目にして、幕府からの禁圧を逃れ、たとえそれが「俗文芸」としてであれ、江戸期の文化の中に深く根を張っていたのである。

8

以上が、近世における「小説」の概観であるが、おそらく、このような「小説」の状況は、幕末から明治維新に至っても、基本的にはそのままの形で継続していたものと思われる。従って、問題はいいいよ、このような「小説」の状況が『西國立志編』によってどのような影響を受けたのかという点に移る。私は、その影響として、以下に述べる三点が指摘できると考えている。

一点目は、〈事実とはかけ離れた虚構を、卑俗な面白さばかりを強調して描き、人の心を惑わせる、無用かつ有害な文芸〉という「小説」の概念を、日本の社会に広く定着させたということである。ただし、この場合の「小説」は、①西洋の文物の一つ、②中国の白話小説、③日本の戯作という三つのイメージが重なり合ったものとして、当時の読者の目に映ったであろうことに留意しなければならない。

まず①について言えば、『西國立志編』の扉には「SELF-HELP. By Samuel Smiles. Trans

lated by K.Nakamura.」^{スミイルス}「英國斯邁爾斯著」^{スミイルス}「原名自助論／一千八百六十七年倫敦出版」^{スミイルス}「中村正直譯」と記され、この著が西洋の書物の翻訳書であることが明示されている⁹⁾。当然、本文中に登場する「小説」なるものも、西洋社会の文物の一つとして人々に認識されたはずである。勿論、『西國立志編』には、「小説」の本文そのものが掲載されているわけではないので、当時の人々は西洋の「小説」の実体に触れぬまま、その概念だけを受容したということになる。

市島春城が大正十四年に『早稲田文學』に掲載した「明治文學初期の追憶」には、次のような記述がある⁹⁾。

明治の九年十年の頃に帝大でボツ／＼西洋小説に読み耽ることが行はれ初めたが、しかし此の趣味家は甚だ少なかった。先輩には金子堅太郎君が此方面の隠れもない人であつた。洋行中小説ばかり読んでゐたと云ふことが同君に對する非難であつたなど西洋文學はまだ理解されなかつた。

文中の金子堅太郎がアメリカに留学していたのは、明治四年から明治十一年にかけてである¹⁰⁾。引用文にあるように、この頃、西洋の「小説」に直接接触した日本人は、まだほとんどいなかった。だとすると、ここで気になるのは、「洋行中小説ばかり読んでいた」ことを非難する社会の風潮、つまりは、西洋の「小説」というものに対する当時の日本人の否定的な価値観が、どこから生まれたのかという点であるが、そこにはおそらく、『西國立志編』が大きく影響していたと思われる。なぜなら、明治初年代の様々なメディアを見渡してみても、西洋の「小説」についての特定の価値観を、多くの日本人に定着させることができたものは、『西國立志編』以外に見あたらないからである。特に金子が帰国した頃は、明治十年に改訂版である活版洋装一冊本も刊行されるなど、『西國立志編』がますます多くの読者を獲得し、国民的テキストとなって一世を風靡していた時代でも

ある¹¹⁾。『西國立志編』によって提示された「小説」概念がもととなって、西洋の「小説」は、まず第一に無用かつ有害なものとして明治初年代の日本人に認識され、その認識は少なくとも明治十年代に入っても継続していたと考えられるのである。

ちなみに、このような風潮の中、明治十一年十月から翌年四月にかけて、リットンの *Ernest Maltravers* および *Alice* を原作とする丹羽純一郎訳『歐洲奇事 花柳春話』全五冊が刊行されることとなる¹²⁾のだが、その跋文で、翻訳者である丹羽は次のように述べている¹³⁾。

譯者云ク^{ロードリ}牢度倫氏小説二十二卷ヲ著シ細カニ^{アラハ コマ}古今ノ人情ヲ探ツテ遠近ノ異俗ヲ記シ一讀以テ人世ノ悲歡正邪ヲ詳知スルニ足ラシム而シテ我朝ノ爲永春水ノ著ニ係ル梅曆等ノ如ク讀者ヲシテ徒ラニ痴情ヲ醸發セシムル者ニ非サルナリ且ツ其書概ネ實跡アル者ニ^{オホム ジツセキ}基キ彼ノ空中ニ樓閣ヲ畫キ強ヒテ有ル可カラサルノ人情ヲ寫出スルノ類ニ非ラス故ニ其言切ニシテ其情深シ是レ乃チ其書名、人口ニ膾炙シテ遂ニ我邦語ヲ以テ之ヲ翻譯セシムルニ至ル所以ナリ

『西國立志編』には、〈事実〉とはかけ離れた〈虚構〉であるが故に「小説」を無用かつ有害とする考え方が顕著であり、この点については後程あらためて言及することとなるが、それが『西國立志編』の提示する「小説」概念の大きな特徴ともなっている。「邦譯文藝物の嚆矢」¹⁴⁾とされる『花柳春話』の跋文で、翻訳者である丹羽が、原作の「小説」について、「概ネ實跡アル者ニ^{オホム ジツセキ}基キ彼ノ空中ニ樓閣ヲ畫キ強ヒテ有ル可カラサルノ人情ヲ寫出スルノ類ニ非ラス」といった弁護をしなければならなかったのも、裏を返せば、当時の日本人にはすでに、西洋の「小説」に対して、〈事実とはかけ離れた虚構であるが故に無用かつ有害〉という認識が広まっていたことを示しているとも言える。

次に②の中国の白話小説に関してだが、このことは、本稿の前半でも論及したように、翻訳者の中村が、*Self-Help* 中の *novel* や *romance*, あるいは *populer literature* といった語を、「小説」として翻訳したことに起因する。近世の日本において、「小説」は第一義的には中国舶来の白話小説を示すものであった。よって、当時の日本人の中で白話小説を知る人たちは、未知なる西洋の「小説」というものを、まずは中国の白話小説に結びつけて理解したと考えられる。前述の通り、翻訳者である中村自身も、おそらくはそのような理解を行ったはずである。

本国の中国とは異なり、日本における白話小説の社会的な位置づけは、他の漢籍に準じて決して低くはなかったものの、先に言及した近世後期の儒者・佐藤一斎のように、儒教倫理に基づいてその通俗性を忌避する声もあった。中村は、この佐藤一斎を師とする人物であり、また自らも儒者であった。*Self-Help* の翻訳にあたる以前から白話小説を忌避する考えは持っていたであろうが、*Self-Help* を通して西洋の *novel* の存在を知り、それを白話小説と結びつけたことによって、白話小説そのものへの嫌悪感もいっそう強まったものと思われる。彼は、後年、「自叙千字文」（明治十六年作）の中で、自分が井部香山の塾に入った十五歳、弘化三（一八四六）年頃の様子を、「惑溺小説。水滸成癖」（小説に惑溺し、『水滸伝』を読むのが癖になっていた）と告白している¹⁶⁾が、「惑溺」「成癖」という語からも、この告白が懺悔に近いものであることがわかる。彼が「惑溺」した「水滸」とは、当然、唐本の『水滸伝』であろうから、十五歳ですでに漢学の成果が白話小説を読み耽るまでに達していたのは驚嘆すべきことでもあるのだが、中村はそれを、あくまで悔い改めなければならないこととして記したのである。西洋文明への傾倒が増し、『西國立志編』が社会に深く浸透するにつれて、中国白話小説に対する人々の意識にも、微妙な変化が生じたであろうことは容易に想像ができる。

そして、③の日本の戯作についてだが、これも

先に述べたように、近世の日本では、「小説」という語を、読本あるいは草双紙といった戯作を指す言葉として使用することが一部の人々の間では行われていたものの、一般に定着しているとはいえない状況であった。ところが、『西國立志編』の広がりとともに「小説」という語が多くの日本人の目に触れ、中国の白話小説を知らない人々にも「小説」を説明する必要が出てくるにつれて、「小説」を「戯作」に結びつけて理解させようとする傾向が強くなっていったようである。

明治二十二年から明治二十四年にかけて全四冊が刊行された日本初の近代的な国語辞典『言海』¹⁷⁾においては、「小説」は「〔小人之説也〕實説虚説ヲ雜ヘテ戯作セル讀本、多ク通俗ノ文體ニ記ス」と解説されている¹⁷⁾。しかし、これでは明治初年代の実態とは言い難い。そこで、より早い時期の史料をあたってみたところ、中村正直が明治九年十二月発行の『東京新報』¹⁸⁾第一号に掲載した「小説ヲ藏スルノ四害」という文章にその例証を見つめることができた。興味深い内容でもあるので、全文を引用することにする¹⁹⁾。

○小説ヲ 藏 スル四害 得一録ヨリ譯出ス
ゲサクボン モツマイル
 /第一品 行ヲ玷ク ○小説ヲ好ム人ハ必ズ
キョウジヤウ カ ゲサクボン
 正人佳士ニアラズ某氏ナル者アリ好ンデ淫邪
マジメナヒト ナニガシ インジヤ ワルキ
 書ヲ讀ミ手ツカラ鈔シテ日ニ之ヲ玩アソビシ
シヨ ホシ カキヌキ モテ
 ガ意ハズ誤ツテ上官ニ差出ス帳面ノ中ニ夾ハ
ラモ アヤマ チヨウメン サシ
 サミ上官ニ見ラレ其無行ニ由テ貶黜セラレタ
ヘンチュウ フギヤウジャウ シリゾケル
 リ / 第二闈門ヲ敗ル ○小説ヲ好ム婦女ハ醜
ヤブ シウ
カナイ
 聲多シ其幽貞ナル者ハ或ハ勞瘵ヲ以テ死ス痛
セイラ、 ユウテイ ラフガイ イタ
クニシキ
 ムニ勝ベケンヤ / 第三子弟ヲ害ス ○小説ヲ
クニ ワカイモノ
 藏スル者ハ子弟必ラス偷ミ看ル早ク身ヲ破リ
ヌス
 或ハ疾ヲ以テ死ス元氣之レガ爲メニ消耗シテ
シヤウガフ ナクナリヘル
 大器ヲ成ス能ハス世ニ渾金璞玉ノ佳子弟アル
コンケンハクギョク カ シ テイ
ムクナル
 モ往々其父ノ巾箱中ノ密藏ノ物ニ 害セラレ
ホン バコ ナイナシマツテアルワルイホン

病身トナリ大業ヲ成就ス氣力ナキニ至ルモノ
 頗フル多キハ悼ムベシ／第四惡疾多シ ○小
 説ヲ好ミ讀ム者ハ必ス惡疾多シコレ枚擧スル
 ニ暇マアラズ惧レザルベケンヤ

これを見るとわかるように、中村は「小説」という語に「ゲサクボン」と左ルビを付している。「小説」を理解できない読者のために、「小説」とは「戯作本」のことだと、補助的な説明を加えたのである。「小説」＝「戯作」という認識は、このような過程を経て徐々に人々の間に定着していったと推測できる。そして、この認識が定着すれば、そこには自ずと、『西國立志編』で提示された「小説」の概念を、そのまま自分たちの身近にある戯作に当てはめ、戯作が明治の新社会に及ぼす悪影響を懸念する動きも生じてくる。

9

『東京新報』に掲載された先程の文章は、冒頭に「得一録ヨリ譯出ス」とある通り、中国の『得一録』という書物の一部を中村が翻訳したものである。『得一録』は、清の余治編で同治八(一八六九)年に刊行されたもの²⁰⁾だが、高橋昌郎『中村敬宇』によると、中村はこの『得一録』全八冊を、明治九年二月二十八日に自宅に持ち帰ったことが、彼の日記に記されているそうである²¹⁾。中村がどのような経緯でこの書物を手に入れたのかは不明だが、彼は「淫書」に関する官箴を収めた卷十一之一の中から、「収藏小説四害」と「焚燬淫書十法」²²⁾の二つを翻訳し、「小説ヲ藏スル四害」「淫書ヲ焚燬スル十法」と題して『東京新報』第一号に掲載している。「小説ヲ藏スル四害」は、ここに引用した通り、「小説」の弊害を四項目に渡って示した内容であり、「淫書ヲ焚燬スル十法」の方は、直接「小説」という語が用いられてはいないものの、「淫書」が白話小説を含む通俗的な刊行物を指すことは言うまでもなく、その廃絶を説

いた内容となっている。いずれも清朝における儒教的道徳観に基づく小説禁圧を如実に物語るものだが、このような文面を翻訳し『東京新報』に掲載した中村の意図は、どこにあったのか。外国の出来事を、単に興味本位の新聞記事として人々に伝えようとしたわけではないはずである。おそらくそこには、近代国家を目指す明治の新社会に向けて、あらためて「小説」、つまりは日本における「戯作本」の有害性を知らしめようとする意図が働いていたに違いない。

石井研堂『自助的人物之典型 中村正直傳』の中には、戯作に対する中村の姿勢を物語る次のような逸話が記録されている²³⁾。

學生、曾て、同人社に在り、好で稗史小説を讀誦す。然れども、先生の、之を嫌忌する甚しきを知り、目を偷んで之を讀む。一日、春水の梅曆を開き居たりしが、急用ありて外出するに當り、机の下に押隠くして立ち去りぬ。偶々先生、塾中を見廻り、ふと隠せる梅曆に眼を着け、直ちに取て之を懷中し、更に、先生の懷中に在りし冊子を取りて、之に代ゆ。しばらくして、彼れ歸り來り、直に机に倚て、最前の續を讀まんとするに、不思議や、手に觸るゝものは、スマイルスの品行論なり。さては、先生の所爲よと、深く自ら慚愧し、爾後再び小説を讀むの念を絶ち、品行方正の人となれりと云ふ。この學生某氏は、現に文學社會にあり、名聲赫々たる人なり。

中村が東京で家塾・同人社を開設したのは、明治六年。スマイルズの *Character* は、すでに明治四(一八七一)年にイギリスで刊行されており、中村がその邦訳を『西洋品行論』として刊行したのは明治十一年から明治十三年にかけてのことである²⁴⁾。「學生某氏」が誰のことなのかはわからないが、この出来事自体は、おそらく、東京で同人社が開設された明治六年以降、中村が *Character* の翻訳作業を行っていた頃のことかと思われる。為永春水の人情本『春色梅曆』を読み耽る学生の

姿は、森鷗外の自伝的小説『キタ・セクスアリス』の次のような場面にも重なり合う²⁶⁾。

東京英語学校にはいった。(中略)僕は貸本屋の常得意であった。馬琴を読む。京伝を読む。人が春水を借りて読んでいるので、又借をして読むこともある。自分が梅暦の丹治郎のようであって、お蝶のような娘に慕われたら、愉快だろうというような心持が、始めてこの頃萌した。

明治初年代の学生の中には、読本や人情本といった江戸戯作を耽読する者も多かったようだ。市島春城は、前掲「明治文学初期の追憶」の中で、明治八年頃の「東京の書生社會では馬琴の小説——『八犬傳』や『弓張月』や、『美少年録』などを讀むことが流行で、まだ其頃は貸本屋が江戸時代の型で方々にあつた」と述べている²⁶⁾。明治になって新たに出現した「東京の書生社會」が、貸本屋などを通じて江戸戯作の新たな読者層を形成していたことがわかる。

しかし、こういった傾向は、当然のことながら、中村を始めとして、「小説」(=戯作)の悪影響を懸念し、その広がりを見避ける人たちにとっては、好ましくないこととして認識されていた。特に、将来の近代国家の担い手となるべき学生たちが「小説」に没頭することは、いかにしても阻止しなければならないこととして、彼らの目に映ったはずである。そして実際に、当時の教育界には、こうした「小説」排除の動きが強くなって行く。明治初年代の大学の規則を調べてみると、「舎中ニ於テ小説稗史ハ勿論学科ニ係ラサル書籍ヲ讀フ許サス」(「大学東校舎則」明治四年)、「校内ニ於テ小説稗史ヲ閱スルヲ許サス」(「第一大学区東京開成学校規則」明治七年)、「猥褻ニ涉レル雑誌野史小説ノ類ヲ閱シ或ハ囲碁等ノ如キ遊戯ヲナスヲ禁ス」(「東京大学法理文学部寄宿舎規則」明治十四年四月)というように、「小説」禁止を明記するものが多く見受けられる²⁷⁾。これらの規則が禁じた「小説」が、読本や人情本などの戯作を

指すことは言うまでもない。

無論、明治の教育界における「小説」排除の動きは、戯作を「俗文芸」とする近世の価値観を反映したものだと見方もできる。しかし、それが唯一の理由であったとすれば、近世の固定化された身分制度が崩れ去り、新たな価値観が創出されようとしていた明治初年代にあって、戯作に対する人々の見方にも変化が現れてよかつたはずである。時代の先覚者であり、当時の教育界にも大きな影響力を持っていたと言われる福澤諭吉は、その著『文明論之概略』(明治八年)の中で、戯作に関して次のようなことを述べている²⁸⁾。

徳川氏ノ末ニ至テハ世人漸ク門閥ヲ厭フノ心ヲ生ゼリ(中略)其徴侯ハ天明文化ノ頃ヨリ世ニ出ル著書詩集又ハ稗史小説ノ中ニ往々事ニ寄セテ不平ヲ訴ルモノアルヲ見テ知ル可シ固ヨリ其文ノ上ニ門閥専制ノ政ヲ不正ナリトテ明ニ議論ヲ立ルニハ非ズ譬ヘバ國學者流ハ王室ノ衰微ヲ悲ミ漢學者流ハ貴族執政ノ奢侈ヲ諷シ又一種ノ戯作者ハ慢語放言以テ世間ヲ愚弄スル等其文章ニモ事柄ニモ取留タル條理ナシト雖トモ其時代ニ行ハル、有様ヲ悦バザルノ意ハ自カラ言外ニ顯ハル、モノニテ實ハ本人モ訴ル所ヲ知ラズシテ不平ヲ訴ルナリ

江戸期の戯作に「門閥専制」に対する不平を読み取ろうとする福澤の見解は、「婦女幼童」の「遊び物」でしかなかった「俗文芸」に、新たな社会的価値を与える可能性を十分に有していたと言えるだろう。しかし実際には、明治の新体制は、彼の見解とは逆に、読本や草双紙といった戯作を一括して「小説」と呼び、よりいっそう排除の意識を強める方向へと動いた。その背後には、福澤とはまったく別の、「小説」排除を新たな近代の理念として持ち込もうとする大きな力の存在を想定せざるを得ないのであり、その大きな力の源となったと考えられるのが、ほかでもない『西國立志編』なのである。

10

次に、『西國立志編』の影響として考えられる二点目だが、それは、近世においては「読本」や「草双紙」、さらにはその下位分類というように、いくつものジャンルに分かれて存在し、それぞれに異なるものとして認識されていた戯作を、「小説」という言葉で一括りにし、文芸の一ジャンルとする認識を、人々の間に定着させたということである。

中村幸彦は、近世後期の戯作界の状況を次のように分析している²⁹⁾。

作者達の意識は、自然と作品の形態毎に異ったあらわれ方をして、形態によって、読者の主対象を異にするような現象が見られる。合巻物は専ら子女向、滑稽本は主に俗、読本はどちらかといえば雅、黄表紙や洒落本は、自給自足制から離れ出しても、知識人や特殊な嗜好のかざられた人々を対象にした如くである。人情本は勿論俗向で、女性や女性の周囲にある読者を予想して作られた。

このような状況は、高木元が『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷—』の中で、「読本出版数のピークであった文化四、五年を過ぎると中本型読本の読者層が次第に拡大し、合巻の読者と大差なくなってきた」「さらには、これと並行して、半紙本読本でも読者層の拡大があったことを想定してよいかと思われる」と指摘する³⁰⁾ように、かなり大きな読者層の変動を伴いながらも、その基本的な枠組み自体は、明治維新に至るまで継続していたと考えられる。しかし、それが、明治になって「小説」という概念で一本化されて行ったのには、先程から述べてきたように、『西國立志編』およびそれに関連した中村正直の動きが大きく関与していたと思われる。

そしてまた、『西國立志編』が日本の文芸の新たな枠組みとしての「小説」というジャンルを一般化させたことで、「小説」という語が、西洋の

novel や romance といった概念に対応する日本語の受け皿として機能する状況が形作られることにもなった。この点に関しては、明治初年代に刊行された英和辞典の中に、ある興味深い動きを指摘することができる。

まず、*Self-Help* の翻訳が行われていた明治三年頃については、すでに拙稿『西國立志編』における翻訳語としての「小説」³¹⁾でも明らかにしたように、novel や romance の訳語として「小説」をあてた英和辞典は存在しなかった。英和辞典が novel および romance の訳語として「小説」を採用したのは、管見では、明治五年に刊行された『英和字典』³²⁾が最初であり、そこでは、novel は「新説新語、新法、○小説、稗説」、romance は「造り物語、○小説、」と解説されている。この辞典は、編纂者・吉田賢輔による序文に、「吾黨ノ二三子カヲ戮セ日月ヲ費シ英人ニユツタル氏ノ字典ヲ本トシ傍ラウエブストル氏ノ大字典ニ就キ務メテ應用ニ切ナルノ語ヲ譯出シ且ツ翻譯ニ従事スルノ人ヲシテ搜字ニ便ナラシメンガ為メ英漢對譯ノ字典ヲモ採用シ以テ此ノ英和字典ノ一書ヲ作ス」と記されているように、イギリスで出版されたナットール(Peter Austin Nuttall)の辞典を原典とし、邦訳語とともに英華辞典の訳語も取り入れる方針で編纂された。幕末から明治の初頭にかけて、日本人によって使用された英華辞典としては、W・H・メドハースト(Walter Henry Medhurst)の *English and Chinese Dictionary, in Two Volumes.*(一八四七～一八四八年刊)、およびW・ロプシャイト(Wilhelm Lobscheid)の *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation.*(一八六六～一八六九年刊)を挙げることができるが、この二つの辞典の中で、novel および romance にどのような訳語があてられているかを確認したところ、メドハーストの辞典では、nevel が「小説、稗説」、romance が「小説」となっており、ロプシャイトの辞典では、novel が「小説、稗説」、romance が「怪誕、小説、荒唐」となっていた³³⁾。このことから、少なくとも novel および romance

の項について言えば、『英和字典』は、その序文に明記された通り、メドハーストあるいはロブシャイトといった英華辞典の知識をそのまま機械的に取り込み、邦訳語と並べて記載したことがわかる。そして、注目すべきはこの点にある。つまり、この『英和字典』の場合、英華辞典から取り込んだ訳語は、あくまで「翻譯ニ従事スルノ人」の便宜を図って掲載した漢語(中国語)として、本来の日本語訳とは異なるニュアンスで掲載されているということである。解説中の「○」は、邦訳語と漢語(中国語)を区別するために付された記号であり、「小説」あるいは「稗説」といった語が、編纂者の意識の中では明らかに日本語とは別のものとして認識されていたことがわかる。『英和字典』の段階では、「小説」が訳語として採用されたとは言っても、実際には、未だ外国語としての色合いを強く残したままであったと考えることができる。

ところが、その後、明治六年に刊行された柴田昌吉・子安峻編『附音挿圖 英和字彙』³⁶⁾を見ると、*novel* は「小説、新律」、*romance* は「小説、虚妄」と解説されている。この『附音挿圖 英和字彙』は、森岡健二『改訂 近代語の成立—語彙編—』の中でも、「ロブシャイトの訳語を最も多く採用している」と指摘されている³⁶⁾ように、先程の『英和字典』同様、その訳語は英華辞典を参考にしたものと考えられているが、*novel* および *romance* の項について言えば、必ずしも英華辞典の知識をそのまま採用したわけではないことがわかる。つまり、『附音挿圖 英和字彙』は、英華辞典の訳語の中から「小説」以外の訳語を切り捨てると同時に、他の邦訳語からも離れて、「小説」のみを意識的に選び取っている。しかも、*novel* の訳語としての「小説」には、語そのものの読みである「セウセツ」がルビとして施されているだけで、意味説明のための傍訓は一切施されていない。これは、『附音挿圖 英和字彙』の編纂者が、「小説」という語を日本語として扱って不自然ではないと判断したからこそその処置であって、「小説」が日本語として当時の人々の間に認知されつつあった状況を反映してのことと思われる。

『英和字典』の編纂と『附音挿圖 英和字彙』の編纂との間には、それほど大きな時間差があるわけではない³⁶⁾。しかし、「小説」という語に対する認識について言えば、この二つの辞典の間にはかなり大きな違いが生じていたのであり、このことはすなわち、当時の社会に「小説」という語とそれに付随する概念が急速に広まって行き、『附音挿圖 英和字彙』においては、それが西洋概念の受け皿として機能したことを意味している。

ちなみに、明治初年代の啓蒙家の活動を眺めてみると、翻訳語として「小説」という語を用いたものとしては、西周が明治三年から四年にかけて私塾・育英舎で行った「百学連環」の講義が挙げられるが、そこでは、*fable* が「小説」として紹介されているものの、*romance* は「稗史」になっており、*novel* については触れられていない。しかも、「百学連環」の講義はごく一部の限られた人々を対象に行われたもので、その講義内容が、広く社会に影響を与えることはなかった³⁷⁾。また、福澤諭吉について言えば、彼は、幕末から明治初年代にかけて刊行した啓蒙書の中で、「小説」という語を専ら「つまらない議論」「俗説」といった意味で用いており³⁸⁾、彼の著述が文芸概念としての「小説」の流布に影響を与えたという形跡はまったくない。「小説」という翻訳語を用いて西洋の文芸を紹介した『西國立志編』は、当時においては、まさに際だった存在であったと言える。

「小説」という翻訳語は、『西國立志編』によって、西洋の文芸概念を伝えるものとして社会に広がると同時に、明治初期に刊行された英和辞典に邦訳語として記載されることで、より明確な輪郭を持つこととなった。文芸概念としての *novel* の訳語を「小説」^{セウセツ} のみに絞って採用した『附音挿圖 英和字彙』は、「明治になってあらわれた最初の大辞典」であり、「その後の英和辞典に与えた影響はすこぶる大きい」と言われている³⁹⁾。明治初期の社会において、英語の習得が重要性を増すにつれ、人々の意識の中で *novel* と「小説」が一对一で結び付くことに、さほど時間はかからなかったものと思われる。

高田早苗は、昭和二年に『早稲田文学』に掲載した「西洋小説の讀始めと書生氣質の材料」の中で、次のように述べている⁴⁰。

私が其昔東京大學に在學中（明治十一年の頃）丹乙馬といふ私の親しい友人があつた。（中略）此の丹君は、私の知る限りでは日本に於て西洋小説といふものを始めて讀んだ一人であると思ふ。丹君は始めて西洋小説——其書は何んであつたかは忘れた——を自分で讀み、其事を私に物語つて、非常に面白いものであるから是非私にも一讀せよと勧めた。私も其氣になり、二三冊西洋小説を讀み出した。すると一日、散歩に出た折り、古本屋でウエバレーノブルスと題した金縁の立派な本を見付けて、ノブルは小説と心得て居る處から安く値切つてそれを買つて歸つて耽讀した。

この証言からわかるように、明治十一年から十二年になると、英語の「ノブル」(novel)が「小説」であるという認識は、大学生の知識としてはほぼ一般的なものになってきていた。そして、前述の通り、その「小説」の概念は、彼らの意識の中では、おそらく、読本や人情本といった近世の戯作本とも繋がっていたはずなのである。先に引用した『歐洲奇事 花柳春話』の跋文において、翻訳者である丹羽が、「我朝ノ爲永春水ノ著ニ係ル梅曆等ノ如ク讀者ヲシテ徒ラニ痴情ヲ醸發セシムル者ニ非サルナリ」というように、原作となった西洋「小説」の価値を人々に伝えるため、春水の人情本との違いを殊更に強調しなければならなかったのも、当時の日本では、西洋の novel が戯作の枠組みで人々に認識されてしまっていたからにはかならない。実際、『花柳春話』に題言を寄せた成島柳北自身、その文中に、「頃日友人六石子。花柳春話若干卷ヲ寄せ。余ニ一言ヲ題セシム。披テ之ヲ閱スレバ。英人牢度倫氏ノ原著ニシテ。丹羽純一氏カ譯スル所ノ情史ナリ」と記し、この著を「情史」(=人情本)⁴¹として扱っているのである。

そして最後に、『西國立志編』の影響として指摘できる三点目であるが、それは、「小説」が単に社会にとって無用かつ有害なものであるだけでなく、人々の精神、特に年少者の精神に害を与えるものであるという考え方を、一般的な認識として、広く社会に定着させたということである。『西國立志編』の第十一編二十四「稗官小説ノ害」には、次のような記述があつた。

稗官小説。遍ク世人ヲ害シ。就中心志未ダ定マラザル人ヲ害スル。疫癘ヨリモ甚シ。
 （中略）蓋シ小説ヲ讀ク。癡習トナルトキハ、
 壯旺ノ情懷。コレガ爲メニ麻痺シ。健安ノ
 心思。コレガ爲ニ衰耗スルナリ。怕ベシ。

あらためて述べるまでもなく、近世の日本において、「小説」は、あくまでとるに足らない「俗文芸」であり、「婦女幼童」の「遊び物」でしかなかった。しかし、そのような無用のものであったからこそ、「流行風聞」を書き立てて世の中を騒がせたり、猥褻な表現で風紀を乱すなどといった社会的な害悪さえなければ、時には、「童蒙婦女子之心得」にもなるものとして、社会に受け入れられてもいたのである。江戸後期の文人・木村黙翁は、『国字小説通』⁴²の中で次のように述べている。

稗史小説とは何ぞや、当世いふ所の、読本、草双紙の類也、誠に婦女兒童の玩物たれば、物堅き儒者、学士は、読本、草双紙の類は、世を誣ひ、人を惑はず物にて、取にも足らざる物と思ひ、手だに触ざる人多し、（中略）稗史小説の用は、そこらの事に非ず、唯勸善懲惡をもととして、其世の時勢、人情を推し考へ、正史、実録を看るの助と為にあれば、其書の大概を了解して、用に充るぞ宜しからん、（中略）今、一文不通の人歟、婦女兒童

の輩は、諸子教誨の書などは物堅くして、聞にも倦て、なか／＼耳にも入がたく、俚俗の諺の猫に小判のごとし、小説の如きは、仁義、釈教、恋、無常、種々の情態を説出して、自然と五倫五常の道へ導く如くしたる物にて、
たとへ 比喩ば、芳餌を設て魚を釣が如し、其益無しといふべからず、

「小説」が個人の精神を害するものであるという考え方は、近世の日本には見あたらない認識であり、『西國立志編』によって日本に持ち込まれた、新たな「小説」観であったとすることができるだろう。そしておそらく、この新たな「小説」観が、教育の近代化を志向する明治新政府の方針と結び付いたことで、前にも触れたような、明治初年代の教育界における徹底した「小説」排除の動きが生じたのだと考えられる。

そして、もう一つ、この点に付随して重要なのは、『西國立志編』においては、「小説」の有害性というものが、「小説」が〈虚構〉であることから生じると説明されている点である。再び、「稗官小説ノ害」の一部を引用する。

設^テ作^ルタル痛マシキ談話ハ。人ヲシテ憐愛ノ心ヲ起^スシムレドモ。コレニ合^ハル行状ニ導^カシムル^{コト}能^ハズ。吾^ノ心ニ一時情感ヲ受^クレドモ。實事ト相^ト干^ル係セザレバ。久^シキ後ニハ消滅シテ。跡ナキニ至ルベシ。タトヘバ。剛鐵ノ如シ。次第ニソノ本質。ケツ刮^リ去^ラレテ。跳返^スコトノ力ヲ失^フナリ。教大長ハットラー拔^キ的^ニ拉^ス曰ク。假^ニ造^ルノ談ヲ聞^クハ哀憐ノ心ヲ生ズレドモ。哀憐ノ行^ハヲ習^フ能^ハズ。故ニコレヲ聞^クゴトニ。次第ニ感動スル^{コト}薄^クナリテ。後ニハ頑然無情ニ至ルベキナリ」ト云^フヘリ。

ただし、「小説」が〈虚構〉に過ぎないという表現そのものは、近世の戯作者たちの文章にもし

ばしば登場するものであり、先程の『国字小説通』にも、「小説」を「架空無根の言」とする記述が見られる。しかし、同じ『国字小説通』の中で、著者はまた次のようにも述べている。

素より、小説稗官といふことは、細米を稗といふより、街談、巷説、其細碎なる言に比喩し、彼道に聴塗に説く言をも、賢君、王者は棄給はず、稗官を立て称説せしむるも、下民の事情を識給ふ為なり、(中略)正史、実録の有に、何故に斯る野乗を採用ゆるぞといふに、正史、実録は正しき物ゆへ、採用るは勿論の事なれども、正史は其代々々に識せし書なるが故に、中には、事に当りて忌諱べき事は、憚りて有の儘をしるさず、事を避て記すゆゑ、曲筆なしといふべからず、(中略)去ば進、正史を擱て外に抛なければ、彼稗史小説と併視れば、扱は斯もあらん歟と思ふ事なきにあらず、

ここには、「小説」を「架空無根の言」とする考えとはまったく逆の、「小説」こそが、「正史、実録」の「曲筆」を補うべき、〈事実〉を書き記したものであるという認識が表れている。この、一見矛盾しているかに思える『国字小説通』の記述にこそ、近世の「小説」観の非常に重要な特徴が見出せるのだが、この点に関しては、すでに谷川恵一が、次のような明瞭な解釈を提示してくれている⁴³⁾。

『国字小説通』はその直前で「小説」が「架空無根の言」だといっていたことを忘れ、儒者の「小説」観にすりよる。こうした操作を行ないながらそれでも『国字小説通』が矛盾を感じないでいられるとしたら、「架空無根の言」はただちにフィクションではなく「正史実録」に載っていないことといった意味でしかない。／＼けつきよく「小説」はこの時期まだフィクションと同義ではなく、「正史」と「小説」との差異も虚実にもとづくもので

はなかった。

つまり、近世においては、「小説」は「正史」の対立概念として存在し、両者の区別は、「虚」か「実」かではなく、あくまで社会的価値を有するかどうかという点に置かれていた。言ってみれば、「正史、実録」に記載された出来事は、表向きには社会的な価値を持った「正しき物」(＝〈事実〉)として扱われながらも、実際には「虚」の要素を含むものだったのであり、逆に、「正史、実録」から除外されたとるに足らない出来事としての「小説」は、社会的には「架空無根の言」(＝〈虚構〉)と見なされてはいたものの、実際には「実」の要素を含み得るものとして、人々に認識されていたということになる。

そして、ここで再び『西國立志編』に戻ってみると、そこに記された「實事」とは、当然のことながら、今述べたような近世日本の〈事実〉認識に基づくものではなく、西洋近代の合理的思考に基づく〈現実〉としての〈事実〉を指し示すものであることがわかる。そして、その文脈の中での「小説」は、合理的な〈事実〉の対立概念として、非合理的な〈虚構〉と同じ位相に組み込まれ、さらには、〈虚構〉である「小説」を読むことによって無意味な刺激が繰り返され、その結果、健全な精神が失われるという、一見いかにも科学的な〈小説有害論〉が形作られることになる。

現代の視点から見れば科学的とは言い難い〈小説有害論〉ではあるが、明治初期の社会においては、西洋重視の波に乗り、かなり根深いものとなって当時の人々の意識の中に広がっていったようである。明治期の女子教育家として有名な巖本善治は、明治二十年の十月から十一月にかけて三回にわたり、『女學雑誌』に「小説論」と題する長編の論説を連載している⁴⁰⁾のだが、そこで彼は、「世上の道德論者」の中には、「往々小説を読むの徳を掛念して少年子弟を戒しむるの教を爲せるものすら」あることを指摘し、そうした「道德論者」の意見として、次のような説を紹介している。

いっしゆきよくだん わし どうとくろんしや これ せつ つく
一種極端に走つたる道德論者は之が説を作
つて云ふ小説中の記事は元來實際に在らざ
るところのものなり此の實際に存せざる所
の出来事に對して讀者を或は泣かせ或は
喜ばす其の人を感動すること眞に莫大なり
と雖ども然もこの感動を生ぜしむるの度亦た
實際に過ぐるが故に良心の涙と笑ひは殆
んど空に向つて發散するものと云はざるべ
からず斯て一卷の幕引き畢つて讀者則ち元の
如く尚ほ世間實在の悲しむべく喜ぶべきも
のに對しては之を小説中假設の出来事に比較
して感慨を寄すること甚はだ薄からんとす是
れ實に道德上贊むべきものにあらず

「一種極端に走つたる道德論者」と断つてはいるものの、明治二十年の時点において、「小説」を有害なものとする意識は、社会の中に根強く存在していたのであり、しかも、そうした意識の根本には、「小説」が〈事実〉とはかけ離れた〈虚構〉であるが故に、それを読むことによって個人の精神が蝕まれるという、まさに『西國立志編』によって生み出された「小説」認識が息づいていたことがわかる。『西國立志編』が提示した「小説」の概念は、明治初期の日本の社会に影響を及ぼしただけではなく、明治中期に至ってもなお、「小説」の社会的位相に影響を与えるだけの力を維持していたと言えるのである。

12

以上、私は本稿において、『西國立志編』が提示した「小説」の概念と、その概念が明治初期の社会に与えた影響とはどのようなものであったのかを、具体的に考察してきた。充分とは言い難いが、『西國立志編』の影響のもと、明治の新社会において、近代における「小説」の初期段階とも呼べる状況が形作られていたという事実については、明らかにすることができたのではないかと思っている。

ただし、ここで最後に付け加えておかなければ

ならないのは、『西國立志編』において「小説」と翻訳された西洋の文芸が、実際には、本国イギリスでどのような評価を受けていたのかという点である。西條隆雄『ディケンズの文学—小説と社会—』の中には、このことに関して次のような記述が見られる⁴⁶⁾。

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の処女小説が彼を一躍文壇の寵児にしたのは一八三七年、ヴィクトリア女王即位の年であった。そして一八七〇年に五八歳で亡くなるまで、彼は一五の長編小説を書き、さらに短編小説、雑誌記事は何百という数にのぼるが、そのいずれもがベストセラーとなり、三〇余年にわたる作家活動の間、彼はただの一度も筆力の衰えを見せなかった。彼の生涯は、名声をほしいままにした、絶頂期の連続であった。／しかし、彼の生きたヴィクトリア朝前期は、めまぐるしい変貌の時期であった。三〇余年の作家活動の間にディケンズ自身も変わればイギリス社会も変わり、文芸批評もまた変わった。たとえば、一八三〇年代には小説はいまだ文学とは見なされず、なにか低俗で軽蔑すべきものと考えられ、その読書人口もわずかであった。しかるに一八五〇年代には小説が文壇の主流となり、小説全盛時代をもたらして、大衆読者を定着させるにいたった。

イギリスにおいては、一八三〇年代から一八五〇年代の間に、「小説」に対する社会的評価が一変し、「小説」が「文壇の主流」になったとする記述だが、ここに示された状況とほぼ同じ内容の記述を、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)が東京帝国大学で行った英文学史の授業の講義録 *A History of English Literature* の中にも確認することができる⁴⁷⁾。

If there had been any great — any really great 19th century drama before

the Victorian period, we should consider drama before considering fiction because it represents a higher form of literature. But there was no drama of consequence — nothing better than the plays of Sir Henry Taylor, which cannot be put into the front rank by any means. On the other hand the really great prose event of the 19th century was the sudden development of fiction in almost every advanced form. During the 18th century the novel had, indeed, been invented, but perfectly; and English literature has never surpassed the best work of Fielding. But you will remember that there were very few novels of the first rank produced during the 18th century perhaps fifteen titles would cover everything worth remembering. On the other hand the 19th century was the great century of novel writers; and between 1800 and 1900 there have probably been on an average about 100,000 novels produced. Of this vast number, not 100 have been really great; but the fact is striking. As the greatest prose movement of the century was in the direction of fiction we are quite right in taking up that subject next to poetry.

ハーンのこの講義録は、翻訳されたものが『ラフカディオ・ハーン著作集』に収録されているので、該当する部分を引用してみる⁴⁷⁾。

ヴィクトリア時代以前に、何らかの偉大な——何らかの真に偉大な十九世紀演劇があれば、まず第一にその話をしたいと思う。演劇こそ小説よりもはるかに高度な文学形態だからである。しかし、問題にしなければならないような演劇は何もない。せいぜいサー・ヘンリ・

テイラー Sir Henry Taylor(1800—1886)のものがあるだけだが、まさかそれを筆頭に置くわけにもいかないだろう。一方、十九世紀の散文で最大の出来事とは言えば、突如として小説があらゆる進んだ形態を整えて発達してきたということである。十八世紀に小説は、事実上、「発明」されたと言ってよいのだが、そのときすでに改良の余地もないものになってしまっていた。というのも、イギリスの小説でフィールディング以上のものは出ていないからだ。同時にまた、十八世紀には本当にすぐれた作品はごくわずかだったということも記憶しておく必要がある。いいものはせいぜい十五あるかないかといったところだろう。それに対して、十九世紀は小説家の世紀と言っていい。一八〇〇年から一九〇〇年までの間に書かれた小説の数は、およそ十万。もちろん、この中で本当によいものは百とないだろうが、とにかくこの事実だけでも驚嘆に値する。十九世紀の散文では、何と言っても小説が主流なのだから、ここでは詩の次に当然その小説の話をしなければならない。

ハーンが実際にこの英文学史の講義を行ったのは、「一九〇〇年九月から一九〇三年三月までの間」とされている⁴⁹⁾。ハーンの感覚では、「小説」は本来、「詩」や「演劇」の下に位置するものでしかなかった。ところが、いざ日本の学生たちに十九世紀の英文学史を講じようとする、どうしても、「詩」の次には「演劇」でなく「小説」について話さざるを得なくなる。こうしたところに、「小説」がイギリス社会で急速に発展し、散文の「主流」にまで躍り出た様子を、如実に読み取ることができるように思う。ちなみに、西條の文中にも登場したチャールズ・ディケンズは、一八三七年二月から一八三九年三月まで、自らが編集長を務める月刊誌『ベントリーズ・ミセラニー』(Bentley's Miscellany)に、『オリヴァー・ツイスト』(Oliver Twist)を連載するのだが、「この小説はヴィクトリア女王をはじめ多岐にわたる

人々に読まれた」とされている⁴⁹⁾。日本で言えば、江戸の天保年間にあたる時代に、イギリスの「小説」は、すでに社会の中で揺るぎない地位を獲得していたのである。

ならば、スマイルズが *Self-Help* の中に記した、popular literature や novel といったものに対する嫌悪は、当時のイギリス社会において、どのような意義を持つものだったのか。先程引用した西條の著書には、次のような記述もなされている⁵⁰⁾。

一八三〇年代、小説の地位は低く、「小説ごとくくだらぬもの」(“things so insignificant as Novels”)とか、「まじめにとりあげて批評するに値しない」と見なされるのが一般的であった。一つには、ジャンルとして低く評価されていたこと、つまり詩・劇のように心理を描き出すのではなく、変転してやまない風俗(manners)を映す文芸だという判断があったことによる。また一つには、当時膨大な量の三文小説が貸本業者用に作り出されていたからでもある。一七八〇年から一八二〇年の間に、福音主義を唱える中産階級がイギリス読者層の重要部分を占めるようになり、小説を好むのは「飲酒や不義の一段下」(“one step below drunkenness and adultery”)であると考えた偏見が強く、ミルに代表されるように、小説を読めば歴史とか実用書物を読まなくなる風潮を生み出すことになるとの功利思想も手伝った。

おそらく、popular literature や novel といったものに対するスマイルズの意識は、ここに登場する「福音主義を唱える中産階級」と重なるものと思われる。従って、*Self-Help* が刊行された十九世紀後半の社会においては、彼の主張は、多くのイギリス人にとってみれば、かなり保守的な、あるいは時代錯誤的な印象を与えるものであったことが推測できる。そして、このようなイギリス本国の実態と、『西國立志編』の影響のもとに形成された明治初期の日本の「小説」の状況との間

のズレに、日本人自身が気づき始めた時、「小説」近代化の動きが生じ、その動きの一つとして、『小説神髓』⁹⁾が著されることになるのである。

「小説」の近代化を考える際、従来の研究では、『小説神髓』が果たした役割のみが過大に評価され、それ以前の「小説」の状況については、等閑視される傾向があった。しかし、本稿で明らかにしたように、実際は、『小説神髓』の登場以前に、すでに『西國立志編』が源となって、「小説」は文芸の一ジャンルとして一般化し、西洋の novel の訳語としても定着していたのであり、それにもなつて、人々の間には「小説」に対する一定の認識も生まれていた。従つて、『小説神髓』の果たした役割とといったものも、『西國立志編』によって形成された明治初期の「小説」の状況を踏まえた上で再検討されるべきであり、それによって初めて、西洋文学の移入や、「小説」の近代化といった動きの本質についても、明らかにすることができるように思うのであるが、そのことについては、稿を改めて論ずることとする。

(了)

注

- 1) 「小説」という語の歴史については、拙稿「明治初期の社会における「小説」の位相—近世文学との関係および実学重視主義の影響—」(福井大学言語文化学会『国語国文学』第47号, 2008, pp.12-21)でも概略を述べたことがある。
- 2) 『中村幸彦著述集』第七巻, 中央公論社, 1984, p.25.
- 3) 注2に同じ。pp.215-219.
- 4) 『椿説弓張月』「拾遺」は文化七年刊。本文の引用は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本に拠った。括弧内の書き下しは引用者による。
- 5) 『浮世風呂』二編は文化七年刊。本文の引用は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本に拠った。
- 6) 山田俊治「『小説』の十九世紀」(『文学』第10巻・第6号, 岩波書店, 2009, pp.16-37)は、この点に関して詳しい論述を行っている。
- 7) 『類集撰要』所収。本文の引用は、高木元『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷—』(ペリかん社, 1995, p.55.)に掲載されたものに拠った。
- 8) 初刊本『西國立志編』だけでなく、その改訂版である『改正西國立志編』(明治十年刊)の扉にも同じ内容の記載がある。
- 9) 『早稲田文学』大正十四年七月号, p.14.
- 10) 明治四年十一月, 旧藩主・黒田長知の随行人となり渡米。ハーバード大学で学んだ後, 明治十一年九月に帰国。
- 11) この点については、拙稿『西國立志編』はどのようにして明治初期の社会に広がったのか」(金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間社会環境研究』第17号, 2009, pp.69-81)に詳しい言及がある。
- 12) 初編から三編は明治十一年十月, 四編は明治十二年一月, 附録は同年四月に刊行。
- 13) 本文の引用はすべて, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵本に拠った。
- 14) 石川巖『明治初期 戯作年表』文武堂, 1927, p.8.
- 15) 本文は, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵の『自叙千字文』(明治二十年三月)に拠り, 引用の際に訓点は省略した。
- 16) 大槻文彦編。第一冊(あいうえおノ部)は明治二十二年五月, 第二冊(かきくけこノ部/きーーーノ部)は同十月, 第三冊(しすせそノ部/たちーーノ部)は明治二十三年五月, 第四冊(ー一つてとノ部/なにぬねのノ部/はひふへほノ部/まみむめもノ部/やいゆえよノ部/らりるれるノ部/わみうゑをノ部)は明治二十四年四月に刊行。
- 17) 本文の引用は, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵本に拠った。
- 18) 太田愛人『開化の築地・民権の銀座 築地バンドの人びと』(築地書館, 1989)は、『東京新報』を、「東京で最初のキリスト教定期刊行物」(p.80)としている。また、同著には、原胤昭が明治三十四年『福音新報』に掲載した回顧談として、「基督教新聞の名を以ては雑誌発行を企つること能はず。奉教自由の建白騒ぎも、容易に其の目的を遂ぐ可らず。茲に於て中村敬宇氏などは漫りに騒ぎ立つるも益なきことなれば幸ひ余の許に『東京新報』てふ雑誌の廃刊せるものあり、其の名義を継続して基督教を主張すれば可ならずやと忠告せられ、遂に之を再興することとなりたり。鈴木舎定氏之が主筆たりき。(中略)四五十号まで十字社即ち余の十字屋書店から発行したり」との記事が引用されており、『東京新報』の発行に中村が深く関与していたことがわかる。
- 19) 『東京新報』第一号(明治九年十二月十一日発行)の本文はすべて, 東京大学近代日本法政史料センター所蔵のものに拠った。
- 20) 官箴書集成編纂委員会編『官箴書集成』第八冊(黄山書社, 1997)に拠る。

- 21) 高橋昌郎『中村敬字』吉川弘文館, 1966, p.155.
- 22) 注20に同じ。
- 23) 石井研堂『自助的人物典型 中村正直傳』成功雜誌社, 1907, p.116.
- 24) 第一・二編は明治十一年六月, 第三・四編は同十一月, 第五・六編は明治十二年九月, 第七・八編は同十一月, 第九~十二編は明治十三年二月に刊行。
- 25) 本文の引用は, 新潮文庫版『キタ・セクスアリス』(pp.34-35)に拠った。
- 26) 注9に同じ。p.11.
- 27) この点については, 拙稿「明治初期の社会における「小説」の位相—近世文学との関係および実学重視主義の影響—」(福井大学言語文化学会『国語国文学』第47号, 2008, pp.12-21)に詳しい言及がある。
- 28) 本文の引用は, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵本に拠った。
- 29) 『中村幸彦著述集』第八巻, 中央公論社, 1982, p.92.
- 30) 高木元『江戸読本の研究—十九世紀小説様式攷一』ペリかん社, 1995, p.230.
- 31) 拙稿『西國立志編』における翻訳語としての「小説」福井大学言語文化学会『国語国文学』第48号, 2009, pp.11-22.
- 32) 本文の引用はすべて, 東京大学総合図書館蔵本に拠った。
- 33) この点については, 注31の拙稿に詳しい言及がある。
- 34) 本文の引用はすべて, 金沢大学附属図書館蔵本に拠った。
- 35) 森岡健二『改訂 近代語の成立—語彙編一』明治書院, 1991, p.68.
- 36) 柴田昌吉・子安峻編『附音挿圖 英和字彙』(明治六年刊)の「緒言」には, 「庚午ノ春始テ稿ヲ起シ」とあり, 編纂作業が明治三年の春に開始されたことがわかる。
- 37) 『明治文学全集3 明治啓蒙思想集』(筑摩書房, 1967)所収の大久保利謙による「解題」(p.440)には, 「「百學連環」は西の大作で, 諸學を綜合する哲學體系化を企てたものである。明治三年, 沼津から東京へ歸ると私塾育英舎を開いて, 十一月からこの「百學連環」を開講した。これも結局未完成に終わったもので, 西文書中に自筆の「覺書」二冊と, ほかに門人永見裕の筆記した稿本八冊がある」との記述がある。『西周全集』第四巻(宗高書房, 1981)には, 「覺書」と「稿本」の両方が収録されており, 本稿ではこれらを参考にした。
- 38) 「コレヨリ千四百年代ニ至ルマテハ世ノ學者詩歌ヲ玩ヒ小説ヲ悦テ實學ヲ勉ルモノ少シ」(『西洋事情』初編, 慶応二年刊), 「伊太利の大學者「がれりを」なる者地動の説を唱へ世界ハ動き廻ものなりと發明なせしにより千古の疑團 始て氷解又世の小説に惑さるゝものなし」(『訓蒙 窮理圖解』巻の三, 明治元年刊), 「此學校ニ在テ教ヲ授クル者盡ク皆博識ノ士ニシテ腐儒ノ臭ヲ去リ小説ニ惑ハスシテ真理ノ趣ヲ解シ」(『世界國盡』序, 明治二年刊), 「世間ノ愚民人ノ言ヲ信シ, 人ノ書ヲ信シ, 小説ヲ信シ聞ヲ信シ, 神佛ヲ信シ, ト筮ヲ信シ」(『學問ノススメ』十五編, 明治九年刊)など。
- 39) 注35に同じ。p.65.
- 40) 『早稲田文學』昭和二年六月号, p.197.
- 41) J・C・ヘボン(James Curtis Hepburn)による『和英語林集成』の三版(明治十九年刊)には, 「情史」の解説に, 「Syn. NINJŌBON」とある。
- 42) 序文は嘉永二年の執筆。本文の引用はすべて, 『続燕石十種』第一巻(中央公論社, 1980)所収のものに拠った。
- 43) 谷川恵一『歴史の文体 小説のすがた—明治期における言説の再編成』平凡社, 2008, p.78.
- 44) 明治二十年十月二十九日発行の第八十二号に「小説論(第一)」, 同十一月五日発行の第八十三号に「小説論(第二)」, 同十一月十二日発行の第八十四号に「小説論(第三)」を掲載。いずれも無署名だが, 当時, 『女學雜誌』の社説はそのほとんどを巖本が執筆していたこと, また, その内容から考えて巖本のもものと判断してよいと思われる。
- 45) 西條隆雄『ディケンズの文学—小説と社会—』英宝社, 1998, pp.3-4.
- 46) Lafcadio Hearn, *A History of English Literature, VOL.II*, The Hokuseido Press, 1927, p.567. 引用は架蔵本に拠った。
- 47) 『ラフカディオ・ハーン著作集』第十二巻, 恒文社, 1982, pp.87-88.
- 48) 訳者・野中恵子は, 『ラフカディオ・ハーン著作集』第十二巻の「解説」の中で, 「この英文学史が話された一九〇〇年九月から一九〇三年三月までの間には八つの学期があり, この巻の最初で一九〇一年の出来事であるヴィクトリア女王の死に触れていることから推察すると, このII巻部分はおそらく一九〇二年の一月あたりから一九〇三年の春あたりまで, 一年以上の歳月をかけて話されたのではないかと思われる」と述べている。
- 49) 注45に同じ。p.6.
- 50) 注45に同じ。p.47.
- 51) 文學士・坪内雄藏の名で, 明治十八年九月から明治十九年四月にかけて全九冊を松月堂より刊行。